

京都大学	博士（文学）	氏名	趙 偵宇
論文題目	詩人黄遵憲と日本		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>中国清末の文人黄遵憲（1848-1905）は、外交官として日本に滞在した約4年間（1877-1882）に、多くの明治期漢詩人と交流し、彼らのために詩文集の序跋を書き、依頼されれば詩作に批評を加えた。もちろん、『日本雑事詩』（初版1879年、定本1898年）をはじめとする旺盛な作詩活動により、黄遵憲自身の詩才も存分に発揮されている。それまでにも、中国人が日本を対象として作った詩はあったが、わずかな滞在の間に瞥見した印象にもとづく作品が多く、そこには誤解にもとづく表現も含まれる。それに対して、『日本雑事詩』は黄遵憲が定住外国人の視点から見聞した明治日本の社会風俗を正確に紹介しており、過去に比肩するものがない。</p> <p>しかし、『日本雑事詩』および黄遵憲の日本滞在に関する研究は、明治日本の事実観察記録という面から論じたものが多く、詩としての価値という面からの研究は乏しい。本論は、詩人黄遵憲にとっての日本滞在をどう意味付けるかという問題意識から出発し、『日本雑事詩』をはじめとする黄遵憲の日本関連作品、及び日本滞在中の詩論に着目し、黄遵憲研究における新たな地平を模索する試みである。</p> <p>序論では、黄遵憲が外交官として日本への赴任を決意し、日本で『日本雑事詩』を著すに至るまでの背景をとりあげた。父の黄鴻藻と同様に、一家の長男、幼い頃から開花させた才能、科挙での挫折の連続、という経歴をたどった黄遵憲は、挙人及第後に進士及第をめざすことなく、外交官の道を選んだ。この決断は、詩人黄遵憲にとっても大きな転換点となる。清代までの詩人にとって日本はなじみの薄い土地であり、古人の作品と重なることのない「我」の詩の創造をめざす黄遵憲にとって絶好の題材となった。黄遵憲は、40歳以前に作った詩の大部分を自ら破棄したと伝えられるが、ただ『日本雑事詩』のみは1898年に再刊している。黄遵憲の詩作活動で『日本雑事詩』がこれほど重要な地位を占めるにもかかわらず、詩作の一環として評価しようとする態度は先行研究にあまり見られない。これは大きな問題である。</p> <p>第一章「『日本雑事詩』の改訂：『日本国志』と比較しつつ」は、『日本雑事詩』諸本の書誌を対象とした説明に続き、初版と定本所収の詩を一首ごとに比較し、それを基に『日本雑事詩』改訂の理由を分析した。『日本雑事詩』初版（1879年）と定本（1898年）の間で、黄遵憲は『日本国志』（1887年）を完成させている。黄遵憲の述べるところでは、『日本雑事詩』初版に彼は日本の旧派の学者の見解から影響を受けた面があったため、西洋に従って一新を遂げた日本の成功を信じた後に書いた『日本国志』とは作者の意識が異なっていた。こう述べた後に、黄遵憲は『日本雑事詩』改</p>			

訂について言及し、改訂の理由が旧から新への思想的変化にこそあると見せかけた。本章は、黄遵憲のことばを疑わず受け入れてきた先行研究とは異なり、『日本雑事詩』初版、同定本、『日本国志』を比較して、黄遵憲は旧から新へと方向転換したのではなく、新旧折衷の立場であったことを指摘する。さらに当時の清朝においてみられた、新に対する容認と拒絶との二元対立の政治状況につき説明し、黄遵憲が自身の「転向」を示したのは、定本出版により世間の注意を惹くことで、初版では伝え切れなかった新旧折衷の主張を再び提唱しようとした意図がある可能性も提示する。

第二章「『人境廬詩草』の中の『日本雑事詩』」もまた『日本雑事詩』の改訂を扱う。『日本雑事詩』の改訂をめぐる先行研究には、改訂の理由を思想的な面のみから論じて文学的観点を考慮しないという傾向、さらには『日本雑事詩』の詩集としての価値を軽視する傾向が見られる。論者は、まず明治初期における中日の漢詩交流の状況、及び『日本雑事詩』の初稿完成後に黄遵憲が日本の文人たちに意見を求めた姿勢につき説明し、詩集『日本雑事詩』が誕生した背景につき述べる。次に、王韜や錢仲聯の『日本雑事詩』に対する評価を検討し、彼らが『日本雑事詩』が詩集であることを認めつつも、黄遵憲の詩作品とは見なしていないという微妙な扱いにつき指摘する。その後、『日本雑事詩』と『人境廬詩草』の比較をすすめ、以下の二つの観点から、後世の評価により、詩という位置づけから脱落してしまった『日本雑事詩』を、再び本来の位置へ据えなおすべきだと論じる。第一点は、『日本雑事詩』と「『人境廬詩草』自序」に記された黄遵憲の詩論（詩之外有事、詩之中有人）との密接な関連性である。黄遵憲は、古人の作品の束縛から逃れるために、作者の「我」（「人」）が、古人が書いたことのない「事」を題材として詩を詠むことを主張している。本章は、『日本雑事詩』の成立時期やその改訂過程から、同書こそがこうした論点の形成に密接に繋がることを証明する。第二点は、『日本雑事詩』と『人境廬詩草』とが詩歌創作上で相互に関わりをもつことである。本章では、単に題材の類似性だけでなく、言語遊戯や典故使用など個々の詩の表現的な面からも、両者の関連性を示す。

第一、二章がそれぞれ『日本国志』『人境廬詩草』を参照しつつ『日本雑事詩』を考察したのに対して、第三章「『日本雑事詩』と明治開化風俗詩」は、さらに明治初期の開化風俗を主題とした日本漢詩を比較対象として『日本雑事詩』を論じる可能性及び必要性を明らかにする。日本滞在中の黄遵憲は、清国外交官の一員として勤務しながら、詩人として明治漢詩壇でも活躍した。『日本雑事詩』は、明治漢詩人の助言も得た「中日協力」により完成された詩集と見なせるだけでなく、中国と同時に日本でも読者に受け入れられ評価されたとも言える。それゆえ、『日本雑事詩』を中国詩史の流れにおいてのみ捉えようとするれば、正しく評価できない恐れがある。例えば、いち早く日本「近代」と接触した黄遵憲は、当然ながら近代的物事を『日本雑事詩』に詠んだ。中国詩史においての『日本雑事詩』は、これによって「近代的」に見

える。しかしながら、明治初期に文明開化の風俗を謳歌した漢詩（総生寛編輯『東京繁昌新詩』（明治八年）、平山果・宮内貫一編輯『日本開化詩』（明治九年）など）と比較してみれば、『日本雑事詩』が「近代」を詠いながら、それに対して一定の距離を保っていることがわかる。本章では、『日本雑事詩』をはじめとする黄遵憲の作品と明治開化風俗詩が、それぞれ幕府時代及び明治初期という時代をどのように描写しているかを分析し、両者の相違を指摘する。たとえば、明治の文明開化を称えた日本漢詩人は徳川幕府や鎖国期日本に対して批判的であるが、黄遵憲は賞賛している。また、文明開化の象徴である蒸気船・車などの詩題において、黄遵憲と明治詩人の「近代」に対する感覚の差を探ってみると、「文明」の価値を反転させる黄遵憲の考え方が見てとれる。

ここまでの三章は、主に詩歌創作者という面から詩人黄遵憲と「日本」との関連性を問題としてきた。第四章「清代詩学史の中の黄遵憲：在日期間の詩論を手がかりに」は、日本滞在中に黄遵憲が漢詩の批評家として活躍した一面に注目する。黄遵憲は中国詩歌理論史でも重要な地位を占め、その詩歌創作上の主張は、のちに中国近代詩を切り拓いた梁啓超や胡適にも大きな示唆を与えた。本章では、主に後世の詩論への影響という面で重視されてきた黄遵憲が清代詩学において占める位置を、新たな視点から究明する。黄遵憲の在日期の詩論を分析することで王士禛・袁枚が彼に与えた影響を読み解き、さらに彼の詩論の総体を、清代の桐城詩派・神韻派・性霊派また吳喬や趙執信の論点と比較分析し、先行する詩論からの影響を証明しつつ、黄遵憲の「超越」について指摘する。特に、黄遵憲は詩人の内面的感情を重視することで作品の独自性を表す従来の詩論からさらに一步を進め、詩人自身が、古人に描かれていない自己の外側にある「事」を経験し、それを詩に詠うことによって、詩人自身を自立させることを主張した。こうした「事」の重視は、日本滞在経験をはじめ、世界各地の事物を経験する志を遂げた、黄遵憲自身の人生経験に密接な関係がある。

結論では、さらに「詩人の成立」という大きな観点から、本論文の研究上の意義を述べる。詩人黄遵憲の形成には、いくつかの重要な転期が挙げられる。青少年期、詩人としての方向性を模索していた成長期、日本に滞在して詩人として尊敬されつつ後の「詩之外有事、詩之中有人」という核心的詩論の端緒となった『日本雑事詩』を作り出した確立期、そして、イギリスにおいて「『人境廬詩草』自序」を執筆し、『人境廬詩草』の詩稿の整理に着手し、『日本雑事詩』の修正を行った成熟期である。

『日本雑事詩』初版はその確立期に書かれ、定本は成熟期にまとめられた。言い換えれば、黄遵憲は詩人としての確立期に日本を経験して詩に詠い、さらに成熟期に再び距離を置いて「日本」に向き合ったことになる。詩人は、連続した過程を経ることで、新たな詩人になる。黄遵憲の場合は、その過程の中に、彼にとっての「日本」という存在の大きさを見てとることができる。

(論文審査の結果の要旨)

1870年代の半ば、清朝は各国との近代的外交関係の構築をめざし、海外公館設置・外交官派遣に着手する。清朝によって派遣された外交官たちは、初代英国公使郭嵩燾(1818-1891)をはじめ、深い中国古典の教養をそなえた伝統的士大夫であり、初めて体験する海外事情につき、興味深い日記・旅行報告書・書簡を数多く書き残している。こうした外交官のうち、文学的に最も良質の記録を残したのが、1874年の明治政府による台湾出兵の直後、1877-1882年に清国公使館参贊として日本に滞在した黄遵憲(1848-1905)であった。当時の日本の知識人たちの多くは、伊藤圭介のような洋学系の科学者まで含めて、一定の水準以上の漢詩文作成能力を保持しており、清国外交官にとって筆談を通じた情報収集は容易であった。こうして知り得た日本事情を体系的に紹介した著作が、黄遵憲の『日本雑事詩』『日本国志』である。特に前者は、明治日本という未知の世界につき、中国人が簡便に知ることのできる詩集として、1878年の初版刊行後いくたびも版を重ねて広く流布した。『日本雑事詩』に関する研究としては、実藤恵秀・豊田穰訳(1943年)以来、笈久美子・劉雨珍・林香奈の共同作業による新訳(1995年～)をはじめ、少なからぬ成果が日本・中国で公にされている。

こうした学界の現況に対し、論者は『日本雑事詩』を扱った先行研究の多くが、同書が明治日本の社会・風俗を紹介しているという「事」の面のみを偏重していると異議を唱える。『日本雑事詩』が詩集として著されたものである以上、「詩」という根幹をなおざりにするべきではないし、詩人黄遵憲における日本体験も相応の扱いをされてきたとは言えない、というのが論者の明確な主張である。

詩人としての黄遵憲、詩集としての『日本雑事詩』という位置づけを行うため、論者は第一章「『日本雑事詩』の改訂：『日本国志』と比較しつつ」において、1878年の初版から1898年の定本に至る『日本雑事詩』の現存諸本を精査し、一首ごとの改訂の状況を明らかにする。つづく第二章「『人境廬詩草』の中の『日本雑事詩』」は、『日本雑事詩』と黄遵憲の主たる詩集『人境廬詩草』とを対照し、両者の関連を細かく論じる。ここでは、あたりまえに見える作業を緻密に積み重ねることで、既存の研究では気づかれなかった事実がいくつも指摘される。以上二章が、黄遵憲の著作そのものに即した検討であるのに対して、本論の後半は、明治日本漢詩・清代詩学も視野に入れて黄遵憲の詩や詩論を把握しようとした部分である。まず第三章「『日本雑事詩』と明治開化風俗詩」では、明治日本の漢詩人たちが文明開化を題材として作った漢詩「開化風俗詩」を比較の対象としながら、『日本雑事詩』の特質を論じる。第四章「清代詩学史の中の黄遵憲：在日期間の詩論を手がかりに」では、黄遵憲の日本滞在期間の著作中に散見する詩歌評論を網羅するだけでなく、明治日本の漢詩人たちとの間で交わした非公式筆談記録まで含めた調査をおこない、その基礎の上に清代詩論との対照をおこなった。そして、黄遵憲が、清代に流行した王士禛・袁枚らの詩論を熟知していたのみならず、新しい事物・自然の発見が詩作にとってもつ意義を日本滞在中を通じて悟ったことが解明される。さらに本論の大尾となる結論では、外交官とし

での日本滞在の4年の経験が、黄遵憲自身の詩についての自覚をもたらしたこと、近代中日の漢文学交流にとり重要な意義をもつ期間であったことがまとめられている。

本論の第一の貢献は、『日本雑事詩』『人境廬詩草』『日本国志』から筆談記録に至るまで、黄遵憲が日本滞在中に著したすべての作品を用いて、その詩と詩論の革新性を解明した点にある。従来の研究は、『日本雑事詩』を独立した作品として扱おうとする傾向が強く、『人境廬詩草』『日本国志』までを把握しようとした分析が比較的少なかったように思われる。本論が、『黄遵憲全集』（2005年）に集成された資料を駆使し、自ら周到に調査した『日本雑事詩』諸版本の知見も加え、詩人黄遵憲にとって日本が持つ意味を複数の角度から説いたことは、高く評価される。

第二の貢献は、黄遵憲を明治漢詩・明治漢学との接触、さらには清代詩学の継承と変革という大きな流れの中に置いて考えようとしたことである。論者の指摘によれば、1870年代の東京では日本と中国の異なった詩風が交錯し、しかも日本側が黄遵憲を模倣する一方的な関係ではなく、黄遵憲も日本漢詩の影響下に新たな詩を創造したことになる。清朝末期の文体・詩体が、梁啓超ら戊戌政変後に日本での長期亡命生活を余儀なくされた言論人たちにより急速に変容していったことは、夏暁虹らにより論じられてきた。その端緒は1870年代に既にあったという論者の指摘は、中国文学における前近代と近代の接続を論じるにあたって、有力な基点を提供する。

第三の貢献としては、『日本雑事詩』の版本間の関係を詳しく示したことを挙げておきたい。『日本雑事詩』初版と定本との内容が大きく異なることは従来からも言われてきた。論者は、いま実見できるすべての版本についての情報を調査し、主たる版本の違いを一覧形式にまとめたのみならず、収録された詩の内容・排列上の異同も表形式で提示している。さらに改訂の背景には、作品の質を追求する黄遵憲の姿勢があったと説く。将来の研究において、ひとつの道標となる意見であろう。

もとより、本論には今後補っていくべき点もある。たとえば、黄遵憲ら清国外交官と明治日本の漢詩文作家たちとの交渉をよりの確に説きあかすには、明治前期の新聞雑誌が日常的に掲載していた漢詩文の内容を系統的に調べることを通じてこそ、より緻密で着実な分析が可能になる。また黄遵憲『日本国志』『人境廬詩草』と『日本雑事詩』を一体化しようという方向性は、今後なお多角的に深めていく余地があるだろう。また、先行研究が『日本雑事詩』の「事」ばかりに着目して、「詩」の特性を十分に評価できていないと論者は強調するが、中国古典詩は多面的にとらえうる存在であって、「事」に重点を置いた作品が許されないわけではない。もちろん、これらの点については、論者自身が十分に自覚して、さらなる研究に取り組みつつあり、将来の達成が期待される。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、令和2年2月17日、調査委員4名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。